

The page features several green triangles of varying shades (dark green and light green) scattered across the white background. Some are solid, while others are semi-transparent. They are positioned around the central text and the author's name.

# 双子と地球

greentea0117

あるところに双子が住んでいた。そっくりな双子。ふつう双子といってもどこか違うもの。でもこの双子は瓜二つだった。笑い方も、髪形も、服装も。学校でもどこでも二人の見分けはつかなかった。

双子はそのまま大きくなり町へでかけた。ぱりんと音がしたのでふりむくと、三十代くらいの男があっけにとられて二人を見ていた。その足元には男が見ていたのであろう陶器かなにかが粉々に砕け散っていた。男も双子もそのまま見合ったまましばらく動けなかったが、男が、  
「すみません、あなたたちのせいじゃないんです、いや……すみません」

と言った。双子は驚かれることに慣れていたが、この男の驚き方は尋常ではなかった。二人は興味をひかれたが、同時に本能的な危険も感じた。でも結局男に誘われるまま店を出た。外にベンチがあってそこに座った。

「ナンパですか？ 私たち今日用事があるんです」

「いや、そうじゃないよ、うん」

男は言った。平日の昼間にいい男が何をしているんだろう？ 双子はいぶかしんだ。

「言われなれてると思うけど、えーと、君たちがすごく似てるからびっくりして……失礼だとは思ったんだけど」

「ええ、ほとんどの人は、無神経なおばさんなんかをのぞいては面と向かってそんなことは言いませんよ。そのおばさんだって、かわいいという意味をこめてくれてはいるので、あなたのほうがタチが悪いかも」

「確かにその通り。でも率直に言うに、君たちはそっくりだ。そっくりな双子はいるけど、そもそも双子というのはそっくりなものだけど、なんていうか君たちは」

「似すぎている？」

双子の顔が曇った。男は青くなった。この気の小さな男は大胆な行動に出る割には臆病だった。

「持っていたものを落として割ってしまうほどに？」

もう片方が言った。二人はじっと男を見ていた。男は紙袋に目を落とした。割ったものを弁償して、破片を袋に入れてもらったのだった。

「ときどき僕は自分をこんな割れてしまった破片のように感じるんだよ」

男は言った。

「破片？」

双子の片方が聞いた。そっくりな顔が二つ男を見ている。

「そう二度とはもとに戻らない」

「多かれ少なかれみんなそんなもんでしょ」

双子のもうひとりがいう。二人とも全く同じ表情をしている。

「ねえまた失礼なことを聞いてしまうかもしれないんだけど、きみたちはその物事に対する感情

なんかも同じなの？ 例えば今僕に対して感じていることとか」

「はは」

男は笑った。双子もやっとなし少しだけ笑った。

「僕はそのお、こう見えても学生だよ。研究生というべきか。時間ばかりあるから、それに頭ばかり使うから、よけいなことを考えちまう。だからたまにこうやって学校から離れてみると……このざまだ」

「ふーん、でもその年まで、ってあなたの年知らないけど、学校でなにしてんの？」

「地球のなりたちについて調べてるんだ」

「地球のなりたち？」

「陸があり海があり空がありましたとさ」

双子は言った。

「地球がどうやってできたかってことさ」

「ふーん、言われてみれば妙かも？ うまれてこのかたずっとその上にすまわせてもらってる、丸い丸い地球について私は何も知らない。いつも自分たちのことばかり忙しくて、せっせと自転・公転してくれてる地球について何も知らない。それってまるでセイラのことについて何も知らないってことみたいね、考えてみると」

「なにそれ私が地球ってこと？」

もう一人の双子はエマと言った。男は栗林公彦と名乗った。

「時間とらせちゃったし、なにかおごってあげたいけど、そんな余裕もないんだ」

「べつにいいよ。単刀直入に聞いてくる人いないから、結構おもしろかったよ」

エマは言った。

「勉強がうまくいくといいね。栗林さんのやってることがうまくいってどういうことなのかよくわからないけど」

栗林は名刺を取り出してそれぞれに渡した。

「地球になりたちについてきまぐれにでも興味がわいたら、連絡ください」

「やっぱり変なナンパじゃん」

「いやほんとに違うよ。ほんとに驚いたんだよ。何度も言ってごめん」

栗林はよろよろと頼りなげに立ち去った。セイラとエマは顔を見合わせた。

「どうするこれ」

二人の手に残された、全く同じ名刺。普通なら気持ち悪くて速攻やぶりすてたいけれど、二人はなぜかそうできずにいた。